

# 「長崎大学外国人留学生アンケート」に見られる留学生の意識

鹿 島 英 一  
 實 平 雅 夫  
 齋 藤 寛

## 1. はじめに

以前、長崎大学外国人留学生指導センターでは日頃、留学生を指導しておられる本学の指導教官の方々にアンケート調査をお願いしたことがある<sup>1)</sup>。質問内容は指導教官が自分の指導している学生個々の日本語能力について、どのような認識を有しているかを我々が知るためのものであった。

さて、当センターでは1993年12月に再び留学生に関するアンケート調査をお願いした<sup>2)</sup>。今回の対象は個々の留学生であり、目的は留学生自身が自らの日本語能力についてどのような認識ないし意識を持っているかを知ることである。幸い、前回の調査からほぼ三年しか経っていないため、留学生数の増加も三割程度に留まっている。従って、前回の調査結果と比べれば、指導教官と留学生の間の意識の異同についても見ることができる。

## 2. アンケート調査の実施について

長崎大学には1994年1月1日現在、175名の留学生がいる<sup>3)</sup>。彼らに対して次頁の様なアンケート調査を実施したところ、154部が各部局の関連部門を通じて回収された。つまり、9人中ほぼ8人から回答があったわけである。尚、表1はその部局別の状況だが、特に際立った偏りは無さそうである<sup>4)</sup>。

表1 部局別の回収状況

教育	経済	医	歯	薬	工	水産	教養	熱医	海生	
5	15	38	6	9	31	17	13	1	19	回答
5	15	47	7	9	38	17	14	2	21	総数

## 長崎大学で学ぶ留学生の皆さんへのアンケート調査のお願い

外国人留学生指導センター

該当する事項に○を付けてください。

A. あなたのチューター (Tutor) のことについてお聞きします。

1. あなたには学校で決められたチューター (Tutor) がいますか。

a. いる      b. いない

2. 「a. いる」と答えた人に聞きます。

(1) その人はあなたと同じ [ 学部 (クラス、ゼミ、研究室、教室)  
大学院 (研究室、教室) ]

の人ですか。

a. はい      b. いいえ

(2) その人の身分は何ですか。

a. 学部学生      b. 大学院生      c. その他

(3) その人と合う回数と時間はどのくらいですか。

1 年間に a. 4 回以下      b. 5～8 回      c. 9 回以上

1. 月 1 回  
2. 月 2 回  
3. 月 3 回  
4. 月 4 回～

1 回に a. 2 時間未満      b. 2～3 時間      c. 3～4 時間  
d. 4 時間以上

(4) その人とは、どんな話をしますか。

a. 勉強・研究のこと      b. 生活のこと      c. 困ったときの相談事

(5) チューター (Tutor) 制度はあなたにとっていいと思いますか。

a. とてもいい      b. すこしいい      c. あまりよくない

d. まったくよくない

(6) チューター制度はチューター (日本人) の国際理解にとっていいと思いますか。

a. とてもいい      b. すこしいい      c. あまりよくない

d. まったくよくない

B. カウンセリング (Counseling, 相談する所) についてお聞きします。

1. 困ったときによく相談に行く所 (人) がありますか。

- a. ある      b. ない

2. 「a. ある」と答えた人に聞きます。

その人はどんな人ですか。

- a. 同級生      b. 保証人      c. 指導教官

d. 事務官 (例: 留学生係)

e. 外国人留学生指導センター (International Student Center)

f. その他 ( )

C. 日本語の学習についてお聞きします。

1. 外国人留学生指導センターの他に、日本語を教えてくれる所がありますか。

- a. ある      b. ない

「a. ある」と答えた人は、その所 (人) を書いてください。

( )

2. 外国人留学生指導センターの日本語の授業は、毎日の生活に役に立っていますか。

- a. とても役に立っている      b. すこし役に立っている  
c. あまり役に立っていない      d. まったく役に立っていない

3. 外国人留学生指導センターにもっとして欲しいことがありますか。

- a. ある      b. ない

「a. ある」と答えた人は、どんなことをして欲しいか書いてください。

例: 『めがね橋』のような情報紙を作ってほしい。

( )

D. あなたの日本語の能力についてお聞きします。

1. 指導教官と日本語で話しますか。
  - a. すべて日本語で話す。
  - b. 専門領域の話は外国語（英語など）だが、日常会話は日本語で  
する。
  - c. すべて外国語（英語など）で話す。
  - d. 話をする共通の言語がほとんどない。
  
2. 講義やゼミの日本語が理解できますか。
  - a. すべて理解できる。 b. 半分くらい理解できる。 c. ほとんど  
理解できない。
  - d. 講義やゼミは外国語（英語など）で行われている。
  
3. 外国人留学生指導センターの日本語学習を現在受講していますか。
  - a. 受講している。
  - b. 今は受講していないが、以前は受講していた。
  - c. 現在も以前も受講したことがない。
  - d. 今は受講していないが、センターへは新聞や雑誌などを読みに  
行く。
  
4. 「b.」と「c.」の人に聞きます。
 

どうして、今、日本語学習をしていないのですか。

  - a. 十分、上手になったから。
  - b. 受講したいが、指導教官の許可がでないから。
  - c. 研究室では英語を使い、日本語を使わないから。
  - d. 受講したいが、時間がないから。
  
5. あなたが長崎大学に入学した時、日本語能力はどのくらいでしたか。
  - a. ほとんどできない。
  - b. 買い物などができるだけ。
  - c. 事務官と話したり、大学の通知が理解できるだけ。

- d. 専門領域の話や日本語の論文が半分くらい理解できる。  
 e. 専門領域の話や日本語の論文がとてもよく理解できる。

6. 長崎大学で勉強・研究生活をするには、どの程度の日本語能力を持っているのがいいと思いますか。

- a. ほとんどできなくていい。  
 b. 買い物などができるだけでいい。  
 c. 事務官と話したり、大学の通知が理解できればいい。  
 d. 専門領域の話や日本語の論文が半分くらい理解できる。  
 e. 専門領域の話や日本語の論文がとてもよく理解できる。

7. 「b.」と「e.」の人に聞きます。次のどれが必要だと思いますか。

- ① 講義がわかる。 ② 討論・発表ができる。 ③ 専門書が読める。  
 ④ 論文が書ける。

8. あなたは、現在、外国人留学生指導センター (International Student Center) の日本語の授業を

- a. 受講している。 b. 受講していない。

9. 「b.」の人に聞きます。以前に受講したことがありますか。

- a. ある b. ない

10. 長崎大学では、どのくらい日本語を学習するのがいいと思いますか。

	週日数	一日当たり時間数
入学～半年後	( )	( )
半年～1年後	( )	( )
1年後～1年半後	( )	( )
1年半後～2年後	( )	( )
2年後～2年半後	( )	( )
2年半後～3年後	( )	( )

11. 長崎大学での日本語学習について、意見があったら書いてください。

12. 長崎大学でのあなたの身分はどれですか。

- a. 1～4年生      b. 研究生      c. 大学院生 (MC)  
 d. 大学院生 (DC)      e. 研究員

ご協力ありがとうございました。

表2 対象となった留学生の、身分別・部局別人数

	学部学生	大学院生	研究生	聴講生	計
教育学部	1(1)		4(4)#		5(5)
経済学部	13(13)		2(2)		15(15)
医学部	2(2)	28(38)	8(12)		38(47)
歯学部	0(0)	4(5)	2(2)		6(7)
薬学部	2(2)	6(6)	1(1)		9(9)
工学部	9(11)	9(13)	12(14)		+ 31(38)
水産学部	2(2)	5) 12(10)	2(4)	1(1)	17(17)
教養部	12(12)*		1(2)		13(14)
熱帯医学研究所			1(2)		1(2)
海洋生産科学研究科		18(20)	1(1)		19(21)
計	41(43)	77(87)	34(44)	1(1)	+154(175)

( )内は在学生数

+ : 1名は学年の明記無し

\* : 2年生中の2名も含む

# : 1名いる教員研修生を含む

医療技術短期大学部、商科短期大学部：外国人留学生は共に0名

尚、学部正規生については2年生以上は基本的には各学部から回収された。  
 また、医学部の研究員の分も1部回収されたが、今回も調査対象外である。

### 3. 対象となった留学生の、身分別・部局別人数

表2の様に、最多は医学部の47名で、工学部の38名、海洋生産科学研究科の21名、水産学部の17名、経済学部の15名と続いている。(経済学部を除けば)前回より皆かなり増えている。特に、医学部と工学部の伸びが目立つ。しかも、工学部の場合は留学生(教育)を担当する専門教育教官職の新設のメドである20名を既に遥かに超えている。一方、身分別では大学院生が全体の約50%を占め、研究生と学部生がほぼ25%ずつを占める。

また、長崎大学で留学生の担当を主業務とする専任教官の配置と留学生の身分や所属部局との関係は次の様である。即ち、外国人留学生指導センターと教養部に各2名、また水産学部、医学部、経済学部には各1名教官がいる。その内、今回の調査と関係のある日本語教育に限れば、それに従事しているのは当センターと教養部と経済学部の計5名である。そして、センターは主に大学院生と研究生を、また教養部と経済学部はそれぞれの部局の学部学生を主に担当するとされている。尚、当センターに日本語補講や生活相談に来る一部の研究員は今回の調査からは除外してある。

### 4. アンケート結果の分析

#### 1) 指導教官と話す言語について

表3 部局別回答者数

	教育	経済	医	歯	薬	工	水産	教養	熱医	海生	計
外国語のみ			8						1	1	10 (6%)
日本語 外国語	1		16	6	3	1	8			4	39 (25%)
日本語のみ	4	14	11		6	30	9	13		14	101 (66%)

質問D1(指導教官と話す言語)については、「日本語だけ」(a)と答えた者が101名(66%)、「日常会話だけ日本語」(b)としたものが39名(25%)、「すべてを外国語(英語など)」(c)としたものが10名(6%)である。また、

(d)は無く、無回答は4名(3%; 医3名, 経済1名)であった。尚、複数の項目に印を付けた医学部の3名((a)+(b)、(b)+(c)、(a)+(b)+(c):各1名)は無回答の項に加えた。また、(不可能な選択肢の)複数の項目に印を付けた場合は以下でも同様に扱う。

ところで、この結果は((d)が無いから)日本語しか意志疎通の言語が無い者が66%、日本語以外の手段のある者が31%であると解釈することもできる。勿論、中には日本語でも他言語でも十分に意志疎通が可能なものにも拘らず、日本語か外国語のいずれか一方だけしか使わないというケースがあり得ることを全く否定するわけでは無いが、それが統計結果に影響するほどあるとは日頃の経験からは考え難いからである。尚、以下でも同様の解釈を採る。

表4 「留学生の入学時日本語能力」と  
「指導教官と話す言語」との関連

	(a)ほとんどできない	(b)買物など簡単な話	(c)事務話や通理解	(d)専門領域或る程度	(e)専門領域十分理解	無不明	等計
外国語のみ	7 (70%)	3 (30%)					10 (100%)
日本語 外国語	12 (31%)	12 (31%)	10 (26%)	4 (10%)		1 (3%)	39 (100%)
日本語のみ	14 (14%)	9 (9%)	26 (26%)	37 (37%)	12 (12%)	3 (3%)	101 (100%)
無回答	1		1		1	1	4
計	34 (22%)	24 (14%)	37 (24%)	41 (27%)	13 (8%)	5 (3%)	154 (100%)

さて、ここからは表3の「指導教官と話す言語」分類を軸に、いろいろな質問(調査)との関係を見ていこう。最初は、「留学生の入学時日本語能力」との関係で、表4はその詳細(%は各項目の内部比率)である。

先ず、10名の「外国語のみ」群では(a)日本語がほとんどできない、(b)買物などの簡単な会話しかできない、の様な日本語能力の低い者ばかりである。次に、39名の「日本語・外国語(併用)」群では(c)事務官と話ができ、大学の通知が理解できる、(d)専門領域に関して或る程度日本語で対応ができる、の様な日本語能力のやや高いものが幾分増えて来るが、基本的には「外国語



のみ」群と同じである。また、この両者を併せれば、(a)+(b)+(c)日本語能力の低い者、が49名中44名と大半（90%）である。尚、これは全体154名の29%に当たる。（表4'を参照）

一方、101名の「日本語のみ」群では、(d)+(e)専門領域に関して日本語で対応ができる者、が半数（49%）ほどいる。従って、この場合には意志疎通を図る別の言語がある場合に比べて、日本語能力が比較的高いことを示している。だが、同時にそれは残りの半数（51%）は依然として留学の目的を達成するだけの準備が未だに整っていないこと、また四人にほぼ一人は、(a)+(b)日常の生活面でも対応に苦慮している、と留学生本人が感じていることも示している。尚、これらは全体154名の32%と15%に当たる。

結局、長崎大学での「入学時点の日本語能力」は3人に1人は主に外国語に頼り、3人に1人は留学に使う言語の準備が無く、特にその半数は日々の生活に使う言葉にも困るということである。

〈表4'〉

	(a)ほとんどできない	(b)買物など簡単な話	(c)事務話や通知理解	(d)専門領域或る程度	(e)専門領域十分理解	無 等 不 明	計
外国語使用	19 (39%)	15 (31%)	10 (20%)	4 ( 8%)		1 ( 2%)	49 (100%)

次は、日本での留学生活に「留学生が必要と感じる日本語能力」との関係で、表5はその詳細（%は各項目の内部比率）である。

先ず、「外国語のみ」群では(a)日本語がほとんどできなくていい、(b)買物などができるだけでいい、(c)事務官と話したり、大学の通知が理解できればいい、が大半である。つまり、意志疎通可能な言語があれば、日本語能力に必ずしも高いものを求めないということである。次に、「日本語・外国語（併用）」群では(c)の他、(d)専門領域に関することが半分くらい理解できる、や(e)専門領域に関することがとてもよく理解できる、のが望ましいと思う者が大半となる。つまり、やや高い能力が必要とされているわけで、「外国語のみ」群とは顕著に違う。尤も、(a)+(b)+(c)が39名中14名（36%）いるから、少なくとも3人に1人は専門領域の理解に日本語は必要ないと思っているらしい。尚、この両者を併せると、(a)+(b)+(c)日本語能力は低くても構わない

者（49名中22名で、全体154名の14%）が(d)+(e)高い方がいい者（49名中24名で、全体154名の16%）とほぼ同数いる（表5'を参照）。

表5 「留学生が必要と感じる日本語能力」と  
「指導教官と話す言語」との関連

	(a)ほとんどできない	(b)買物など簡単な話	(c)事務話や通知理解	(d)専門領域或る程度	(e)専門領域十分理解	無等不明	計
外国語のみ	3 (30%)	2 (20%)	3 (30%)		1 (10%)	1 (10%)	10 (100%)
日本語 外国語	1 (3%)	2 (5%)	11 (28%)	11 (28%)	12 (31%)	2 (5%)	39 (100%)
日本語のみ	3 (3%)	1 (1%)	12 (12%)	21 (21%)	62 (61%)	2 (2%)	101 (100%)
無回答					1	3	4
計	7 (5%)	5 (3%)	26 (17%)	32 (21%)	76 (49%)	8 (5%)	154 (100%)

一方、101名の「日本語のみ」群では、(d)+(e)専門領域に関して日本語で対応ができる必要があると思っている者が、8割以上（82%）いる。日本語で日本での留学生活を送ろうとしているわけである。ただ、(a)+(b)+(c)でよいとする16%の者の留学に対する姿勢はどう考えたらいいのだろうか。尚、これらは全体154名の54%と10%に当たる。

結局、長崎大学の「留学生生活に必要な日本語能力」は3人に2人は専門（の少なくとも半分）を理解するに足る能力が必要だが、3人にほぼ1人は低いままでよく、特にその中の一部（全体の10%）の者は専門領域を理解するに足る、指導教官との共通の言語は必要ないと考えていることが分かる。

〈表5'〉

	(a)ほとんどできない	(b)買物など簡単な話	(c)事務話や通知理解	(d)専門領域或る程度	(e)専門領域十分理解	無等不明	計
外国語使用	4 (8%)	4 (8%)	14 (29%)	11 (22%)	13 (27%)	3 (6%)	49 (100%)

2) 入学時の日本語能力と留学生自身が必要とする日本語能力に関して

次は、日本で留学生活を送るのに望ましいと留学生本人が思う日本語能力と「入学時の日本語能力」の関係(表6)である。無論、「入学時の日本語能力」も所詮は留学生自身の主観的な判断に過ぎないが、(入学時における)現状と努力目標という観点から見れば、それはそれで充分意味がある。尚、表6ではスペースの関係で次の様な略記法を採用する。即ち、

A: 留学生が必要と感じる日本語能力(理解が必要な程度)

- (a) ほとんど不要
- (b) 買物などだけ
- (c) 事務官の話や大学の通知だけ
- (d) 専門領域の事項が半分ほど
- (e) 専門領域の事項が十分に
- (f) 回答が無いが判断不明

B: 入学時の日本語能力(理解可能な事柄)

- (a) ほとんどできない
- (b) 買物などができるだけ
- (c) 事務官の話や大学の通知だけ
- (d) 専門領域の事項が半分ほど
- (e) 専門領域の事項が十分に
- (f) 回答が無いが判断不明

表6 「留学生が必要と感じる日本語能力と「留学生の入学時日本語能力」との関連

A \ B	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	計
(a)	4	2	8	9	9	2	34 (22%)
(b)	2	2	7	6	6	1	24 (14%)
(c)		1	7	7	22		37 (24%)
(d)			1	9	31		41 (27%)
(e)	1		2		6	4	13 (18%)
(f)			1	1	2	1	5 (3%)
計	7 (5%)	5 (3%)	26 (17%)	32 (21%)	76 (49%)	8 (5%)	154 (100%)

先ず、B（入学時の能力）で見ると、(a)+(b)が36%、(a)+(b)+(c)が60%である。つまり、入学時点で専門領域の日本語に対応ができないと感じていた者が5人にほぼ3人いる。更に、十分にできると感じた者はほぼ5人に1人に過ぎない。

次に、A（必要な能力）で見ると、最大の(e)が49%で、これに(d)の21%が続き、(d)+(e)では70%となる。従って、留学生の内の少なくとも3人に2人は日本語で専門領域に対応したいと思っっていることが分かる。

また、これらのことは表6の視覚的な印象ともほぼ一致する。なぜなら、数値の存在領域が左上から右下に掛けての対角線の主に右側に集中していることは入学時の日本語能力では留学生を送るのに充分ではないということ、また値の大きな数字がA(e)の線上にあることは専門領域の理解に使うのは日本語であるべきだと大勢の留学生が感じていることを示しているからである。

### 3) 留学生自身が必要と感じている具体的な日本語能力に関して

留学生が必要と感じる具体的な日本語能力を(d)専門領域に関して或る程度日本語で対応ができる、(e)専門領域に関して十分に日本語で対応ができる、と回答した場合には、次の質問（D7）として、具体的な日本語能力の何が必要かを聞いている。それは、①講義が分かる、②討論・発表ができる、③専門書が読める、④論文が書ける、の上記の項目から選ぶものである。

表7 留学生が必要と感じる具体的な日本語能力

希望する能力 日本語能力	(d) 専門領域 或る程度	(e) 専門領域 十分	計
①②③④	2( 6%)	27( 36%)	29( 27%)
②	8( 25%)	12( 16%)	20( 19%)
④	3( 9%)	16( 8%)	19( 18%)
③	7( 22%)	5( 7%)	12( 11%)
組合せの合計	32(100%)	76(100%)	108(100%)

始めにD7の回答の分析を表7に示す。

これらは①②③④の順に習得が難しいと考えてよい。また、回答は①～④から自由選択するものなので、組合せが多数ある<sup>6)</sup>。また、回答結果は合計

108であったが、その中で多数を占めたのは①②③④が29、②が20、④が19、③が12であり、この4者で全回答組合せの74%を占めた。他の組合せは全て6以下の少数であるため省略する。

①②③④全項目に対する希望は、(d)では2 ((d)内比率6%)だが、(e)では27 ((e)内比率36%)であり、両者の合計は29 ((d)(e)合計の内比率27%)と最大多数になっている。(もし最も難しい④を加えて実質上同等の①②③④+④の項目で数えれば、各々5 ((d)内比率16%)、43 ((e)内比率57%)、48 ((d)(e)合計の内比率44%)である。)従って、半数近くがそこまでの能力を身に付けたいと思っていることが分かる。だが、同時に(d)と(e)の数字が対照的であるから(e)専門領域に関して十分に日本語で対応ができる、ということをも具体的には④(日本語で)論文が書ける、という形で捉えている者が多いことも分かる。

次に数の多い②は、(①②を含めれば)(d)は11、(e)が13である。また、③は(①②③を含めれば)(d)は7、(e)が6である。何れにしても、これらの場合には①②③④(+④)と違って(d)と(e)にほとんど違いが無い。後で再度触れるが、指導教官との意識の違いが見られる。

次に「指導教官と話す言語」との関連を見る。自らに希望する日本語能力を(d)(e)と回答した留学生の内、「指導教官と話す言語」が、「外国語のみ」が2、「日本語・外国語(併用)」が23、「日本語のみ」が79、無回答等(不明)が4であったが、(無回答以外の)各々について、実数と百分率を出すと表8-1、表8-2の様になる。(尚、「外国語のみ」は(e)で①②③④が1、(d)で③が1である。)

①②③④(+④)という高度の日本語能力の希望は「日本語・外国語(併用)」が23の内の7の30%(従って、「外国語を使用」は25の内の8の32%:表8'参照)であるのに対して、「日本語のみ」では79の内の39の49%とほぼ1.5倍である。また、「日本語のみ」の場合では留学生自身も①②③④を望んでいるものが多いのである。尚、表8-1の②+①②は(d)は5(=3+2)名、(e)は3(=2+1)名で、①②③は(d)も(e)も共に無い。また、表8-2の(d)は②+①②は5(=4+1)名、③+①②③は6(=5+1)名で、(e)は①②も①②③も共に無い。

表8-1 指導教官と話す言語が「日本語・外国語（併用）」の場合に  
留学生が必要と感じる具体的日本語能力

希望する能力 日本語能力	(d) 専門領域 或る程度	(e) 専門領域 十分	計
①②③④	2( 18%)	4( 33%)	6( 26%)
②	3( 27%)	2( 17%)	5( 22%)
④	0( 0%)	1( 1%)	1( 4%)
③	2( 18%)	1( 8%)	3( 13%)
組合せの合計	11(100%)	12(100%)	23(100%)

( ) 内は(d)、(e)、および(d)(e)の日本語能力組合せ回答合計に対する百分率

〈表8'〉

	(d)	(e)	計
①②③④+④	2( 17%)	6( 46%)	8( 32%)
②	3( 25%)	2( 15%)	5( 20%)
③	3( 25%)	1( 8%)	3( 12%)
組合せの合計	12(100%)	13(100%)	25(100%)

( ) 内は(d)、(e)、および(d)(e)の日本語能力組合せ回答合計に対する百分率

表8-2 指導教官と話す言語が「日本語のみ」の場合に  
留学生が必要と感じる具体的日本語能力

希望する能力 日本語能力	(d) 専門領域 ある程度	(e) 専門領域 十分	計
①②③④	0( 0%)	23( 38%)	23( 29%)
②	4( 21%)	10( 17%)	14( 18%)
④	2( 11%)	14( 23%)	16( 20%)
③	5( 26%)	4( 7%)	9( 11%)
組合せの合計	19(100%)	60(100%)	79(100%)

( ) 内は(d)、(e)、及び(d)(e)の日本語能力組合せ回答合計に対する百分率

## 4) 留学生が自分の日本語学習に必要と考える時間数に関して

これは入学後半年単位で、週日数・一日当たりの必要と考える時間数を質問した際の回答である。ここでは週日数について述べる(表9)。またこの回答は、当該学生が本センターの授業を「受講している」及び「受講したことがある」の場合に答えるようにしたものであるが、「受講していない」上に以前にも「受講したことがない」の場合にも回答しているものがあったため、それらを含めて扱うことにする。入学～半年後の期間に対する回答が最多で95(最少は2年～2年半後の69)であった。その後は、入学後の日数が増加するにつれて回答数が減少した。無論、これには未確定要素の多い中長期的将来のことについては言及し難いということもあるため、入学後の期間と関係なく機械的に同じ数字が振ってあるものも見られた。また、週日数を6日や7日とするものも少なからずあり、日本の制度が現実感覚として理解されていない面もある。統計上は毎日と解釈して、5日に入れた。

表9 留学生が自分の日本語学習に必要と考える週日数

	5日	4日	3日	2日	1日	計
入学～半年後	28	15	36	11	5	95
半年後～1年後	14	18	32	19	7	90
1年後～1年半後	5	8	29	24	16	82
1年半後～2年後	2	6	25	19	23	75
2年後～2年半後	2	1	13	26	27	69
2年半後～3年後	2	1	13	25	30	71

この表9で入学～半年後について見ると、週4日～5日がよいとするものが計43(入学～半年後の比率45%)で、相当な高率である。また、週4日～5日は半年後～1年後で見ても、計32(半年後～1年後の比率36%)の回答がある。入学初期の集中的な日本語教育を必要とする意見の反映であろう。そして、これは最も要望が集中している週3日(入学～半年後で38%の36、半年後～1年後で36%の32)にはほぼ匹敵している。これが長崎大学の留学生の現実である。

1年後～1年半後と1年半後～2年後でもやはり週3日の要望が最も多いが、週2日や週1日とかなり拮抗してくる。2年後～2年半後と2年半後～3年後では週1日が最多だが、週2日という要望もかなり根強い。入学後も

長い期間にわたっての週1～3日程度の日本語教育の希望が多いことが分かる。

次に、「指導教官と話す言語」との関連を見る（表9-1、表9-2）。全調査数154についての回答結果は、先に見た様に「外国語のみ」10、「日本語・外国語（併用）」39、「日本語のみ」101、無回答4であった。

**表9-1 指導教官と話す言語が「日本語・外国語（併用）」の場合の留学生が自分の日本語学習に必要と考える週日数**

	5日	4日	3日	2日	1日	計
入学～半年後	10 (33%)	4 (13%)	9 (30%)	5 (17%)	2 (7%)	30 (100%)
半年～1年後	5 (19%)	3 (12%)	8 (31%)	7 (27%)	3 (12%)	26 (100%)

( )内は段ごとの百分率

**表9-2 指導教官と話す言語が「日本語のみ」の場合の留学生が自分の日本語学習に必要と考える週日数**

	5日	4日	3日	2日	1日	計
入学～半年後	18 (30%)	10 (16%)	25 (41%)	5 (8%)	3 (5%)	61 (100%)
半年～1年後	9 (15%)	14 (24%)	22 (37%)	10 (17%)	4 (7%)	59 (100%)

( )内は段ごとの百分率

尚、指導教官と話す言語が「外国語のみ」の場合は、入学～半年後が4日と2日が各1名、3日が2名の計4名だけであり、半年後～1年後が4日が1名、3日と2日が各2名の計5名である。従って、「外国語のみ」と「外国語・日本語（併用）」を併せた、「外国語を使用」する場合は次の表9'の様になる。



〈表9'〉

	5日	4日	3日	2日	1日	計
入学～ 半年後	10 (29%)	5 (15%)	11 (32%)	6 (17%)	2 (6%)	34 (100%)
半年～ 1年後	5 (16%)	4 (13%)	10 (32%)	9 (29%)	3 (10%)	31 (100%)

( ) 内は段ごとの百分率

入学～半年後と半年後～1年後の日本語学習に留学生自身が必要と感じる週日数を、(指導教官と話す言語が)「外国語のみ」10(回答数4及び5)、「外国語・日本語(併用)」39(回答数30及び26)、それに「日本語のみ」101(回答数61及び59)からそれぞれ寄せられた回答について見たものが、表9-1、表9-2(と表9')である。指導教官と話す言語が「日本語のみ」の留学生の方に、入学後1年間は週3日(ないし4日)以上の集中的日本語教育を望む比率が高いようである。

次は、「留学生が日本語学習に必要と感じる週日数(入学～半年後)」と「留学生の入学時の日本語能力」との関連(表10)を見てみよう。(a)日本語がほとんどできない、の24の内、集中的に週5日とするものは11であるが、週に3日か2日とするものも12で、二極化している。また、(b)買物などの簡単な会話しかできない、の16では、週5日か減るにつれて要望も自然な形で減っている。この様に入学時の日本語能力が低い場合でも、必ずしも留学生は週4日～5日という集中的な日本語学習を望んでいるわけではない。

ただ、(c)事務の話や大学からの通知が理解できる、や(d)専門領域に日本語で或る程度対応ができる、の水準になると、週3日前後の学習を望むという別の傾向が現われる。例えば、(d)の27の内、週3日を望む14というのはその好例である。

表10 「留学生が日本語学習に必要と感じる週日数（入学～半年後）」  
と「留学生の入学時の日本語能力」との関係

	5日	4日	3日	2日	1日	計
(a)ほとんどできない	11	1	7	5	0	24
(b)買物など簡単な話	6	4	3	2	1	16
(c)事務と話・通知理解	7	4	7	4	2	24
(d)専門領域がある程度	3	3	14	5	2	27
(e)専門領域が充分	1	0	0	0	1	2
(f) 無 答	0	2	0	0	0	2
計	28	14	31	16	6	95

次に「指導教官と話す言語」との関連を見る。不明4（回答数2）、「外国語のみ」10（回答数4）、「外国語・日本語（併用）」39（回答数29）、「日本語のみ」101（回答数58）について日本語能力別に解析した（表10-1、表10-2）。合計では（(f)の2と指導教官との言語が不明な2を除いた）91の回答が対象である。

尚、「外国語のみ」は(a)で4日と2日が各1名、(a)で3日が2名で、計4名である。従って、表10-1の値にこの(a)欄だけを加えてその数値変えたものが〈表10'〉の数値となる。このため、表10-1に続く〈表10'〉では(a)欄だけを示した。

指導教官との間で外国語を使う（入学～半年後の）留学生が希望する学習日数は、週5日と週3日が共に30%（33の内の10）で最多だが、週2日も21%（33の内の7）である。一方、日本語だけを使う留学生も週5日が31%、週3日が34%と、これもほぼ同じ様に多極化している。日本語だけを使う留学生が高度の日本語能力を求めていることは、表8-2見るとおりでだが、希望する学習日数については個々人により認識に違いがあるようである。

表10-1 指導教官と話す言語が外国語・日本語（併用）の場合の  
「留学生が日本語学習に必要と感じる週日数(入学～半年後)」  
と「留学生の入学時の日本語能力」との関連

	5日	4日	3日	2日	1日	計
(a) ほとんど できない	4 (44%)	0	2 (22%)	3 (33%)	0	9 (100%)
(b) 買物など 簡単な話	3 (33%)	2 (22%)	2 (22%)	1 (11%)	1 (11%)	9 (100%)
(c) 事務と話 通知理解	3 (38%)	0	2 (22%)	2 (22%)	1 (11%)	8 (100%)
(d) 専門領域 ある程度	0	0	2 (67%)	1 (33%)	0	3 (100%)
(e) 専門領域 充分	0	0	0	0	0	0
計	10 (34%)	2 (7%)	8 (28%)	7 (24%)	2 (7%)	29 (100%)

( ) 内は段ごとの百分率

〈表10'〉

	5日	4日	3日	2日	1日	計
(a) ほとんど できない	4 (31%)	1 (8%)	4 (31%)	4 (31%)	0	13 (100%)

表10-2 指導教官と話す言語が日本語のみの場合の  
「留学生が日本語学習に必要と感じる週日数（入学～半年後）」  
と「学生の入学時の日本語能力」との関連

	5 日	4 日	3 日	2 日	1 日	計
(a)ほとんどできない	7 (64%)	0	3 (27%)	1 (9%)	0	11 (100%)
(b)買物など簡単な話	3 (38%)	2 (25%)	1 (13%)	1 (13%)	0	7 (100%)
(c)事務と話通知理解	4 (27%)	4 (27%)	4 (27%)	2 (13%)	1 (7%)	15 (100%)
(d)専門領域ある程度	3 (13%)	3 (13%)	12 (52%)	3 (13%)	2 (9%)	23 (100%)
(e)専門領域充分	1 (50%)	0	0	0	1 (50%)	2 (100%)
計	18 (31%)	9 (16%)	20 (34%)	7 (12%)	4 (7%)	58 (100%)

( ) 内は段ごとの百分率表

## 5. まとめ

今回の調査より3年前、長崎大学では留学生の指導教官に対して、同様のアンケート調査を実施した。それは長崎大学における、外国人留学生の日本語能力と教官側の要望を初めて明らかにしたもので、それによると次の様な結果を得ている。即ち、

- (1) 指導教官と留学生との間に、日本語以外に意志疎通可能な言語がある場合には、学生に対する日本語能力の要求が比較的 low、意志疎通可能な言語がない場合には、日本語能力への要求が高かった。
- (2) 入学時の日本語能力については、専門領域に日本語で対応できない者が半数いた。また、入学時の日本語能力が低い者であっても、要求する日本語能力は高い場合があった。
- (3) 必要と考える具体的な日本語能力に関しては、①講義を聞くことができる、②専門領域で討論・発表ができる、③日本語の専門書が読める、④日

本語の論文が書ける、の全般についての要求が強かった。

- (4) 日本語教育に必要と考える期間・日数については、入学後1年後までの場合で週4日以上がよいとするものが相当多数あり、また入学後3年後までも週1日・2日の日本語教育を望むものが相当多数あった。

今回の調査は、この前回の調査に続くものである。今回の対象は留学生自身であり、前回は実態調査なら、今回はその意識調査とでも言うべきものである。3年という年数の隔たりはあるが、実際にはそれはあまり考慮に入れなくてもいいように思われる。尚、今回は「指導教官と留学生の話す言語」として i. 「外国語のみ」 ii. 「外国語と日本語の併用（用途別の使い分け）」 iii. 「日本語のみ」の3分類を実施したが、(結果的には i. は稀で) 実際には ii. と iii. に二分されることとなった。ただ、前回の調査との対比のため i + ii の〈表4'〉〈表5'〉〈表8'〉〈表8'〉〈表10'〉を挿入しておいた。尤も、中には日本語でも意志の疎通が充分できるのに外国語だけで話をしていくケースも可能性としては存在しているが、日頃の我々の経験から言うと(留学生から時折耳にする言とは裏腹に)この統計に影響する様な事態は想定し難いのが現実であろう。従って、前回の「日本語以外に意志疎通可能な言語がある場合」と「日本語以外に意志疎通可能な言語がない場合」を、今回は各々(i + ii =)「外国語を使う」と「日本語のみ」に読み替えるものとする。

では、最後に前回の結果に見られる指導教官側の認識と今回の結果に見られる外国人留学生側の意識とのずれを幾つか指摘しよう。最初は、指導教官との意志疎通可能な言語に関してである。前回の教官側の認識では「外国語を使う」が59%、「日本語のみ」が28%、無回答は13%であったのに対し、今回の留学生側の意識では「外国語を使う」が31%、「日本語のみ」が66%、無回答は3%であった(表3)。両調査の間には、ほぼ30%から40%の開きがある。要するに、日本語による意志疎通が、教官側ではできていないと感じているのに留学生側ではできていると思いきんでいる場合が、3組に1組か5組に2組あるらしいのである。

次に、入学時の日本語能力との関係では、前回の調査と同じく「日本語のみ」の場合の方がやや高い日本語能力を持っているという認識を示しているが、「外国語を使う」の場合には幾らか違いも見られる。例えば、前回では

専門領域に日本語で対応できない者がほぼ半数だが、今回の方は90%(表4'の(a)~(c))である。つまり、教官が入学時に感じた程には留学生自身は専門領域の日本語能力があるとは思っていないようなのである。また、前回の調査によれば、教官が(留学生生活を有意義なものとするために)留学生に要求する日本語能力は(外国語が使えるか否かに拘らず)概ね専門領域が少なくとも半分くらい理解できる程度ではほぼ一致を見ているが、留学生側は必ずしもそうではなく、「日本語のみ」か否かによって異なっている(表5、表5')。尚、「入学時」と「必要な」能力の関係は前回と今回の調査はあまり変わらない。ただ、教官側は専門領域の或る程度に日本語で対応ができればいいとしているのに対し、学生側はもっと高いところに必要性を感じているようである。日本語の能力水準の問題なのか、専門知識の水準の問題なのかという認識の違いとも関係があるのかもしれない。

今度は、留学生生活に必要なと考える具体的な日本語能力についてである。前回の調査によれば、教官側で①講義を聞くことができる、②専門領域で討論・発表ができる、③日本語の専門書が読める、④日本語の論文が書ける、の全てを要求するのは33%、少なくとも①と②を望むのは半数ほどであった。だが、今回の調査では留学生側は半数が①②③④(+④)を、また8割が①②以上を必要と見ていたことが分かる(表7)。勿論、これを「できれば身に付けたい」数字と取るか、「できないと困る」数字と取るかは意見の分れるところであろう。尚、「外国語を使う」と「日本語のみ」による傾向の違いは教官側でも留学生側でもほぼ同じである(表8-1、表8-2)。

最後は、日本語教育・日本語学習に必要なと考える期間・日数についてである。前回の調査では、入学からその1年後までの場合で週4日以上がよいとするものが相当多数あり、また入学後3年後までも週1日・2日の日本語教育を望むものが相当多数あった。無論、これは教官側の認識だが、基本的には留学生側もそう異ならない。ただ、留学生側は週3日に希望がやや集中している<sup>7)</sup>ことに特徴がある(表9)。理由の一端は、表1と表2に示した長崎大学の部局構成にあるかもしれない。即ち、留学生の大半は大学院かそれを目指す学部研究生で、部局も多くが理科系である上、1994年の3月以前の段階では、文科系の学部には大学院が無いのである。因みに、本稿の連名の筆者3名の内、2名も本来は理科系の出身者である。

以上、長崎大学における、外国人留学生の日本語能力に関する留学生側の

意識を明らかにした本アンケートの質問項目の内のDについて、3年前に実施した教官側の意識調査と比較対比しながら、その結果を述べた。言わば、本アンケートの中間報告である。いずれ質問項目のA、B、Cについても、機会を見て報告したいと考えている次第である。

尚、全体の構成は稿の性格上、前回の調査との対比を意識したものにしてある。無論、それは表の番号までも同じにしたという意味ではないが、容易に対応関係が解るようになっている。

#### 〈注〉

- 1) 1990年11月現在でのものだから、今回(1992年12月)より3年前である。尚、報告の詳細は(上条・齋藤1991)を参照されたい。
- 2) 質問内容は、この他にA. チューター B. カウンセリング C. 日本語学習に関する項目もある。
- 3) 前回の調査時は留学生総数が130名で、73名の指導教官が108名の指導に当たっていた。残りは指導教官のまだ決まっていない学部学生などである。
- 4) 水産学部と海洋生産科学研究科と医学部に理解し難い分類のもの各一部があった。それは、水産のDC生と海生と医のMC生というものだが、単純な書き間違い以外に、制度理解の不徹底の可能性も否定できない。
- 5) 水産はMC生の11部に(注4)のDC生を入れると在籍総数の10名を越えるが、留学生が自ら記入する無記名調査のため更なる追跡調査は不可能である。学部研究生がMC生、大学院(MC)研究生がDC生と書いた可能性はあり得る。
- 6) 事後情報では複数回答が可能だと思わなかった学生が少なくなかったようなので、今回は①②③④+④、①②③+③、①②+②の各項目についても数え上げた。
- 7) 表9の〈入学～半年後〉の週5日にはかなりの希望が出ているが、往々にして「毎日」「(週)6日」「(週)7日」等々という回答形式が認められ、熟慮の結果でないとも受け取れる。

#### 〈引用文献〉

- 1) 上条厚・齋藤寛(1991)「長崎大学外国人留学生日本語教育アンケート」

(1990年11月) から見た長崎大学外国人留学生の日本語能力」『長崎大学留学生教育の理念と組織化について—平成2・3年度教育研究特別経費(特別分)研究報告—』(1992年3月) 長崎大学外国人留学生指導センター発行.

### 付 記

本稿は長崎大学平成5年度教育研究学内特別経費の交付を受けて行なった共同研究、『国立大学に於ける外国人留学生教育の理念と組織化に関する学際的研究(Ⅱ)』(研究代表者:外国人留学生指導センター長 齋藤 寛、研究分担者:外国人留学生指導センター助教授 鹿島英一、外国人留学生指導センター講師 實平雅夫)の成果を中間報告書の形で、鹿島、實平、齋藤がまとめたものである。

(1994年2月)